

とうしん 東晋・353年／おうぎし 王羲之 (303? ～ 361?)

(教科書 56・57 ページ／145 ～ 152 ページ)



概要・特徴

中国・東晋の**王羲之**の書で、その代表作にして最高傑作と称される行書の古典である。
王羲之は会稽山(浙江省紹興市)の麓にある蘭亭に名士41人を招いた。禊の儀式を行った後に、曲水の宴という詩会を催し、各自が作った詩をもとに詩集を編んだ。このとき書いた詩集の序文の草稿が「蘭亭序」の原跡であるとされる。原跡は、後に唐の第2代皇帝・**太宗**が所有し、「初唐の三大家」(虞世南・欧陽詢・褚遂良)らに臨書させたり、職人に精巧な模本(複製)を作らせたりした。太宗が亡くなると、太宗の墓である昭陵に納められたと伝えられ、現在、原跡は存在しない。

「蘭亭序」の複製は多数伝わるが、主要なものは、太宗の頃に制作された「張金界奴本」「定武本」「褚模本」「神龍半印本」などが元になっていると考えられている。教科書に掲載の「神龍半印本」は、**双鉤填墨**(文字の輪郭を写し取り、その内側を墨で塗ること)によって作られ、原跡を最も忠実に反映した模本とされる。抑揚を利かせ、運筆の流れに従ってあらゆる文字の姿を生み出す王羲之行書の真価を端的に知ることができる名品である。

作者について

王羲之(303? ～ 361?)は、東晋の官僚。琅邪臨沂(現在の山東省)の名門貴族の出身で、不安定な政治情勢の中、官途を歩んだ。草・行・楷の各書体において類いまれな才能を発揮し、その書は後世、多くの人々に規範として尊重され、「**書聖**」とたたえられた。

王羲之の子である王献之も書の名手として知られ、王羲之と合わせて「**二王**」と称されている。

時代背景

王羲之が登場したのは、貴族文化が花開いた東晋時代である。王羲之が「書聖」とよばれ、傑出した存在として評価されるようになるのは後世のことであり、唐の第2代皇帝・太宗が王羲之の書を愛し、広く収集したことが知られている。